

昭和 15 年東京オリンピック招致活動 成功についての研究

—— 若槻禮次郎と岸清一の果たした役割について ——

古 城 庸 夫*

要 約

東京オリンピックと呼ばれる大会は、昭和 39 年（1964 年）に開催された第 18 回東京オリンピック大会が知られているが、実は（幻の東京オリンピック）と呼ばれる東京オリンピック大会があった。この大会は昭和 15 年（1940 年）に開催が決定していたが、戦局の悪化で大会開催を返上した大会であった。

明治 42 年（1909 年）推薦を受けてアジア初の国際オリンピック委員に就任した嘉納治五郎は、明治 44 年（1911 年）大日本体育協会を設立し、翌年の明治 45 年（1910 年）に開かれた第 5 回ストックホルムオリンピック大会に選手を引率して出場を果たした。しかし日本はそれ以降、多くの戦争へと突入していく。このような当時の世情の中で、なぜ日本は東京オリンピック大会の招致に成功したのかはこれまであまり知られてこなかったと思われる。

また平成 21 年（2009 年）東京都は、平成 28 年（2016 年）第 31 回夏季オリンピック大会の招致を目指して立候補したが、開催はリオデジャネイロ（ブラジル）に決定した。今回の東京オリンピック大会の招致活動は残念ながら不成功に終わってしまったが、昭和 11 年の東京オリンピック招致活動の成功の一因となったと思われる、政治家若槻禮次郎と大日本体育協会会長岸清一の両者が果たした役割と関係について、新たな発見がなされたといえるだろう。

キーワード：幻の東京オリンピック、大日本体育協会、ボートレース、端艇、漕艇、岸清一、若槻禮次郎

はじめに

平成 28 年（2016 年）第 31 回夏季オリンピック大会の招致に向けて、東京都オリンピック招致委員会は立候補を表明し、平成 21 年（2009 年）2 月 12 日国際オリンピック委員会（IOC）に詳細な開催計画を記載した立候補ファイルを提出した。その開催計画の骨子は（平和と環境）というものでありコンパクトなオリンピック大会というもの

でもあった。しかし最終的にはオリンピックに立候補していたシカゴ（アメリカ）、リオデジャネイロ（ブラジル）、マドリード（スペイン）との間で行われた招致合戦に東京は破れてしまったが、その結果を受けた日本オリンピック委員会（JOC）は、オリンピック招致戦略室を立ち上げ継続的に 2020 年夏季オリンピック招致活動を継続していく方針をかためた。

しかし残念な結果に終わってしまったとはいえ、この大会が東京都に決定していれば、昭和 39 年（1964 年）に開催された第 18 回東京オリンピック大会以来のアジア地区では初めてとなる同国での 2 回目の開催となるが、実は昭和 15 年（1940

2009 年 11 月 30 日受付

* 江戸川大学 スポーツビジネス研究所准教授 日本スポーツ近代史、コーチ学

年)9月に開催が決定していた東京オリンピックがあった。

本研究では、「幻の東京オリンピック」と呼ばれているこの大会の開催が決定された昭和11年(1936年)当時の日本を取り巻いていた世界情勢と、困難と思われた東京大会招致を実現した人々の関係の中で新たに判明した事柄を通して、東京オリンピック招致活動を成功に導いたと思われる理由のなかで、若槻禮次郎と岸清一の果たした役割について明らかにすることを目的とする。

1. 時代背景

明治維新を成功させた日本は、明治28年(1895年)の日清戦争で勝利したことにより、朝鮮半島から清国の影響力を無力化すると、台湾を領有し、明治38年(1905年)には、日露戦争の勝利によって朝鮮半島を完全に占領した。

一方ヨーロッパにおいては、大正3年(1914年)ドイツをはじめとした5カ国の中央同盟国と、イギリス・フランス・ロシアの三国協商を形成していた連合国との間で第一次世界大戦が始まった。日本、イタリア、アメリカも連合国側に参戦し、連合国側の勝利に終わると、アジアと日本国内において軍部からの発言力がますます強まっていった。

また、近代オリンピックの創立者であるクーベルタン男爵(Pierre De Coubertin)は、当時の青少年達が生きる希望を失っているのではないかと憂慮していたと思われる。それは彼らが、幼少時に、フランスとプロイセン王国の間で戦われた普仏戦争(明治3年1870年～明治4年1871年)によるフランスの敗戦を経験していたこと、またパリを包囲したプロイセン軍とパリの労働者並びに国民軍の間で行われたパリ・コミューンの戦いで、敗戦のショックを受け経済的困窮に陥っていたからである。やがてイギリスのアスレティズム思想^①に影響を受けたクーベルタン男爵は、平和を願って近代オリンピック(第一回夏季オリンピック大会、明治29年1896年)を創立したと言われている。

2. 西園寺公望と若槻禮次郎

嘉永2年(1849年)京都で太政大臣になることの出来る公家の一つである徳大寺家の次男として生まれた公望は、明治天皇の遊び相手として幼少期を送ると、早くから倒幕を志し、山陰軍事総督に任じられた後明治4年(1871年)パリ・コミューンで騒然としていたパリのソルボンヌ大学に留学した。またパリの下宿で、後にフランス首相となるクレマンソー(Georges Clemenceau)と親交を深め^②、議会政治を元にして下級階層の生活改善を目指しながら国権の増強を図るとした急進主義に影響を受けた。一時帰国後、再びドイツとオーストリアの大使を務め、帰国後は政友会を設立し内閣を組織したが、明治天皇の崩御に伴い、首相指名のできる五元老のひとりとなり、以後政界において長く影響力を発揮した。

そして明治39年(1906年)1月、第一次西園寺内閣の時に大蔵次官であった若槻禮次郎は、西園寺の満州視察に同行し^③、軍部が長く満州に駐留する危険性を心配する西園寺の姿に感銘を受けると、大蔵次官を辞任し、勅選議員として桂太郎(西園寺公望と交代で総理大臣を三度務め桂園時代を現出した)の創設した立憲同志会に入党した。その後、大蔵大臣、内務大臣を務め、大正15年(1926年)第一次若槻内閣、昭和5年(1930年)ロンドン軍縮会議では首席全権として条約を締結し、昭和6年(1931年)第二次若槻内閣を組閣した。

若槻は今日でも平和主義者として知られているが、ヨーロッパでの経験も含めてオリンピック大会の平和という理念を、より深く理解していたと思われる。

3. 若槻禮次郎と岸清一の親戚関係

慶応2年(1866年)2月5日島根県松江市雑賀町に下級藩士の次男として生まれた若槻と、慶応3年(1867年)7月4日に島根県松江市雑賀町に下級藩士の次男として生まれた岸清一は、血のつ

なかりはないが近い親戚であったと述べている⁽⁴⁾。

そこで平成21年(2009年)5月、平成18年(2006年)鳥根県松江市雑賀町の雑賀小学校の改築時に開設された雑賀教育資料館を訪れ、雑賀小学校出身の若槻禮次郎と岸清一を始めとした人物の資料を調査したところ、若槻家と岸家の家系図が展示されていたことにより、若槻と岸の緊密な関係が推察された。

すなわち若槻の養母(ヤオ)は岸の実母の妹であり、若槻の異父兄の譲には岸の姉(テツ)が嫁いでいた事実が判明したことによって、血のつながりはないが近い親戚関係という事柄は、血のつながりはないが従兄であったという、より正しい関係が明らかにされたと思われる。

さらにその後の調査で、少なくとも昭和14年(1939年)に発行された岸清一伝以来不明であった岸の実母の名前が、朝日新聞の死亡広告(明治44年4月7日)により(源)であることも判明した。このような重縁関係から、以下に述べるように両名の上京後、東京に呼び寄せられて暮らした岸の実母(源)は、政界にあって活躍する若槻と法曹界とスポーツ界で活躍する岸の精神的支えになり、結果として両名が常に協力して東京オリンピック招致活動を実行していくことになったのではないと思われる。

やがて苦学の末松江中学校を卒業し、就学補助金を得た岸清一が東京大学予備門に合格すると、一年後れて若槻も司法省法律学校入学を果たした。入学後の岸は英人F・W・ストレンジ(Frederick William Strange)の教えを受け、ボート選手として第一回ボートレースのチャンピオンとなるなど、その後はスポーツ界での活躍を重ねていくようになる。一方若槻は第一高等学校を経て帝国大学仏法科を首席卒業したが、在学中はボートの選手としてボートレースに参加した⁽⁵⁾。

また若槻が他の大学生と同じように官職に付いたのに対して、岸は国際弁護士として活躍する道を選んだが、両名とも卒業後は学士競漕(OBレース)に他の卒業生達と共に参加しているが、その卒業生の多くが政・財・スポーツ界の大名になっていたことが、両名の活動に陰ながら好影響を与

えていくことになったのではないと思われる。

そして明治42年(1909年)、駐日フランス大使ゼラルール(Auguste Gerard)が嘉納治五郎に国際オリンピック委員への就任を求めたとき、すでに岸は、別件による海外渡航の合間にいくつかのオリンピックを視察していた⁽⁶⁾。すなわち、明治37年(1904年)第3回セントルイスオリンピック(アメリカ)、明治41年(1908年)には第4回ロンドンオリンピック(イギリス)を視察し、政府財政委員としてロンドンとパリに駐在していた若槻とも会っていたが、このことは両名が早くから日本にオリンピックを招致することにより平和の道を模索していたのではないと思われるのである。

また第4回ロンドンオリンピック大会からは、初めて国別参加形式が取られたが、このことは世界各国に軍備増大による経費削減のため参加を見合わせる動きが出てきたことで、誕生したばかりの平和の祭典オリンピックの将来をクーベルタン男爵が懸念したとも考えられる。

そこでクレマンソーから前総理の西園寺公望を通して、急速に列強の仲間入りを果たしていた日本への参加要請が成されたと仮定すれば、桂太郎総理と大蔵事務次官の若槻禮次郎をはじめとした日本政府に適当な人選の照会があり、軍部の意向を慮った政府が、非公式の形で嘉納を推薦したのではないと思われる⁽⁷⁾。

4. ボート人脈と嘉納治五郎

また当時海外で有名な日本人の1人が嘉納治五郎であったと思われるのは、嘉納が明治22年(1889年)学習院の教授と教頭をしていた時に、院長との折り合いが悪く⁽⁸⁾、その調整のため欧州へ視察に向かった時には既に嘉納の弟子達がフランスで柔道の指導を行っていたことや、ドイツでは大使の西園寺公望とも面会し親交を深めたと思われる。

またフランスのリヨン大学に留学していた梅謙次郎(民法学の父・鳥根県松江市出身松江藩医の次男として生まれ東京外国語大学出席出身後法学

博士、東京大学教授、現法政大学の校長などを歴任、岸達と同じボートレースに出場し学生クルーのックスを務めている）とも面会したと思われる明治23年（1890年）帰国のためにスエズ運河を経てインド洋に向かう船上でロシアの海軍士官との試合において相手を投げ飛ばした際に相手が怪我をしないように配慮した態度が武士道的で素晴らしいと読売新聞によって広く国内に広められたことも要因ではないかと思われる。

また明治33年（1900年）新渡戸稲造が著したBUSHIDO: THE SOUL OF JAPANにより世界中に武士道ブームが起っていたということを併せ、明治34年（1901年）三たび高等師範学校の校長として就任すると、談話部会と運動部会からなる校友会を組織し、柔道部、撃剣及び銃槍部、弓技部、器械体操部、ローンテニス部、フートボール部、ベースボール部、ボート部、自転車部、角力部の10部を設け盛んに学生にスポーツを奨励したということも推薦理由の一つにあげられるとおもわれる。

しかし大学で草創期のボートも漕いだ経験のある嘉納⁽⁹⁾は当初、隅田川まで歩いて時間がかかるなど効率的に良くないとして明治24年（1891年）熊本の第五高等学校長時代にはボート部を廃するなどあまり理解を示していなかったが⁽¹⁰⁾、講道館を財団法人化するに当たっては成案を法学博士の梅謙次郎の手により完成し、法人の理事には講道館の門弟で柔道2段⁽¹¹⁾の若槻も就任するなど⁽¹²⁾、チームワークを重んじるボート競技の良さをしだいに理解していくようになったのではないかとと思われる。

5. 大日本体育協会の設立

国際オリンピック委員会（IOC）の承認を経てアジア初のIOC委員となった嘉納は明治45年（1910年）に開かれる第5回ストックホルムオリンピック大会出場に向けて日本代表を決定しオリンピック大会に出場する資格を認定する組織作りに取り掛かったが、東京帝国大学、早稲田大学、高等師範学校⁽¹³⁾などからの賛成を受け大日本体

育協会の事務所を東京市小石川区大塚窪町の東京高等師範学校内に置きその一つとしてオリンピック委員会を設けた。

しかし設立当時の組織は学校関係者が多かったために必要経費は有志の寄付で賄い⁽¹⁴⁾、それらを翼賛員と呼びその数は24名にのぼったが多くのスポーツ界と財界人であった。

内訳は会長の嘉納をはじめ西園寺公望、渋沢栄一（日本資本主義の父）、岩崎小弥太（三菱財閥4代目総帥）、古河虎之助（古河財閥3代目当主）や岸清一（日本漕艇協会初代会長、大日本体育協会第二代会長、二人目のIOC委員、協会の赤字解消をたびたび助けた）平沼亮三（日本市民スポーツの父、ボート経験者）添田寿一（日本興業銀行初代総帥）志立鐵次郎（岸の同郷で東京大学の同級生ボート選手、日本興業銀行第二代総帥）などのそうそうたるメンバーであった⁽¹⁵⁾。

しかし協会は慢性的な財政難に陥っており嘉納たちがストックホルムオリンピックに出発している間に訪れたフィリピン体育協会理事であるエルウッド・S・ブラウン（Elwood Stanley Brown, アメリカYMCA）の強硬な要請による上海・マニラ・日本三国による極東オリンピック大会開催の要請に応えることが出来なかった。又それ以降は国内に湧き上がってきた海外大会（オリンピック・極東大会）への派遣希望の増大や協会の代表選手選考方法などの体質改善を求めた世論の高まりに対応するために、青森県で官選知事をしていた武田千代三郎（岸と同じ第一回ボートレース優勝者同じクルー、駅伝の命名者で山梨・秋田官選知事、日本で始めて開かれた陸上競技大会の優勝者）を、東京でイギリスに習い寄付で軍用船の建造を行った協会である帝國海事協会の評議委員に転籍させてから大日本体育協会副会長に向かえ陸上関係者との軋轢を解消しようとしたと考えられる。

しかし嘉納と武田の両者は並び立たず武田は任期を残して大正11年（1922年）大阪高等商業学校に去って行った。また当初岸を副会長に推薦しようとしたが極東大会問題の解決を図るために大正6年（1917年）極東体育協会の競技委員長と

副会長に推薦され日本で始めて開催された第三回極東選手権競技大会を初めての総合優勝に導いたのであった。

6. 岸清一とオリンピック

明治45年(1912年)明治天皇の崩御に続いて大正3年(1914年)皇后が亡くなると、遺徳をしのんだ国民から夫妻を祭る神社の建設を求める声が高まっていった。そこで政府は大正4年(1915年)明治神宮の建設を発表したが、そこでは嘉納治五郎の提言で明治神宮外苑競技場の建設が決定されたと言われている。しかし大正12年(1923年)に起きた関東大震災のために建設資材の不足や労働者の不足もあり一時工事は中断せざるを得なかったが、大正13年(1925年)にストックホルムオリンピックのスタジアムを模して一周400m、1万5千人収容のスタンドと5万人を収容できる芝生席を設けた競技場が完成した。図1は明治神宮外苑競技場の絵はがきで、第一回明治神宮運動競技大会に使われた競技場の様子がよくわかり、若槻内務大臣も祝辞を述べている。図2は第一回明治神宮運動競技大会で行われた15競技の様子である。

またスポーツに対する国民の関心は、オリンピッ

ク大会や極東大会でメダルを徐々に獲得できるようになってきたことで、さらに高まりをみせるようになっていった。このような国内のスポーツに対する関心の高さは大正13年(1924年)内務省の主催で行われた第一回明治神宮競技大会の開催につながり、隅田川で行われたボート競技を含めた15競技で行われ、内務大臣の若槻が祝辞を述べたがこの大会が後の国民体育大会の成立に強く影響を与えたと思われる。

また大正9年(1920年)になると、オリンピック大会や極東大会への派遣代表選手の選考方法およびアマチュア資格問題⁽¹⁶⁾などを巡って、大日本体育協会は度重なる改革要求を受けるようになっていった。そこで大日本体育協会は嘉納を名誉会長に就任させると同時に、大正9年(1920年)に他競技に先駆けて設立された漕艇協会で会長をしていた岸を大日本体育協会の会長に迎えて新たな組織作りを目指していくようになっていったと思われる。

そして日本体育協会会長に就任した岸は選手を引率して大正13年(1924年)第8回パリオリンピックに参加したが、オリンピックを機会に開かれる国際陸上競技連盟に大日本体育協会以外の日本人の陸上競技団体が単独で加盟しようとした問題⁽¹⁷⁾が起こったため、元大日本体育協会で理事

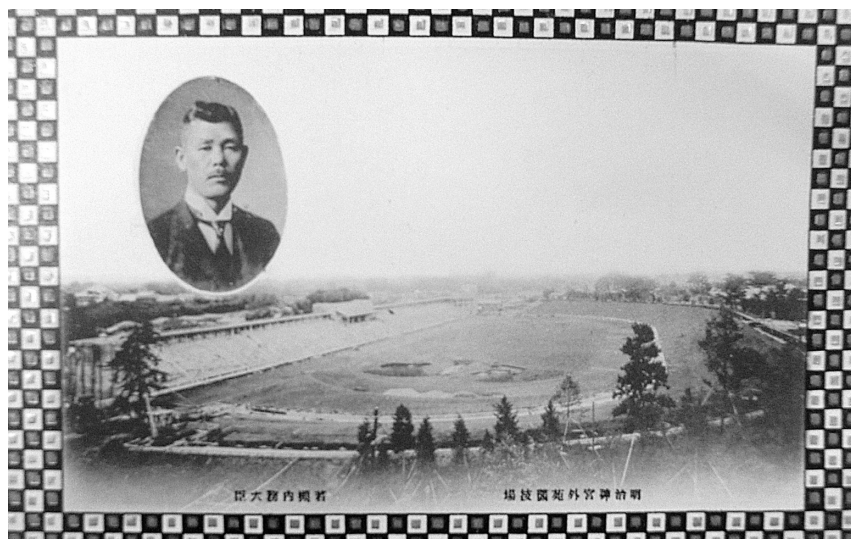


図1 第一回明治神宮運動競技大会 明治神宮外苑競技場 大正13年(1924年)

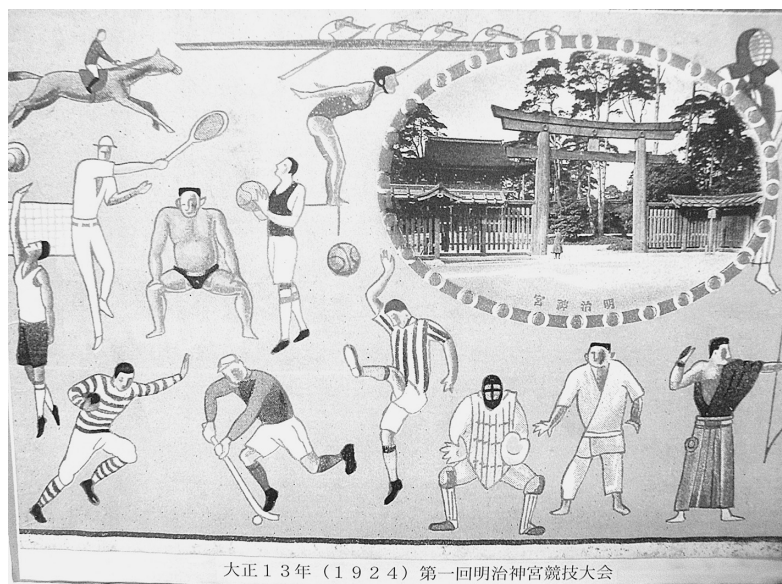


図2 第一回明治神宮運動競技大会 大正13年(1924年)

を務めた経験もある、駐フランス大使館で参事官を務める杉村陽太郎（嘉納塾出身後柔道6段、第一高等学校の途中から東京大学の途中までボート選手、後国際連盟事務局長）らの協力を得て国際陸上競技連盟会長ヨハネス・ジークフリード・エドストローム（Johannes Sigfrid Edstrom, 後第4代IOC委員会会長）に事情を説明し支援を得たことにより大日本体育協会が正式に日本を代表する団体であると認められた。この大日本体育協会の加盟問題の危機を乗り越えたことを契機にして、岸と後に国際オリンピック委員会の会長になるエドストロームは長く友情で結ばれたと思われる⁽¹⁸⁾、東京オリンピック招致問題に関しても大きな成功要因の一つになったのではないかと考えられる。

昭和2年には体育に貢献したとしてフランス政府からオフィシエ・ド・レジオンドヌール賞（Officier De Legiond'honneur）を授与されているがこのことは意外なことにあまり知られていない⁽¹⁹⁾。

また大日本体育協会の理事を長く務めた今村次吉によれば、岸が国際オリンピック委員に就任する以前から、第12回東京オリンピック大会の招致に関して準備工作をしていたと述べていること

から⁽²⁰⁾、昭和7年（1932年）第10回ロスアンゼルスオリンピック大会に日本選手団を引率して乗船した船には往復ともフィリピンやインドなどの選手団と各国の大会関係者が含まれていたことも、その一つではないかと推察される。

さらにそれらのロビー活動の一環としては東京オリンピック大会招致のために昭和7年（1932年）8月3日の夕刻からカルフォルニアのアンバサダーホテル4階で岸が主催した晩餐会の席上でIOC委員会総会に東京市が立候補したことを東京市の市会議員と報告した。なお当日の晩餐会に参加したメンバーは嘉納委員をはじめ東京オリンピック決定に票を投じることが出来るエドストロームを始めとした各国のIOC委員とその婦人も多く含まれており総勢は50名以上にのぼった盛大なものであった。

図3はアンバサダーホテルで行われた晩餐会の様子で、左端が岸清一氏。右側に嘉納治五郎氏と、反対側にエドストローム氏の姿も見える。

また帰国時の船にも日本を経由して帰国するIOC委員や各国の選手も同乗していたので、それらの記事が新聞に掲載されると国内のオリンピック招致熱はさらに高まっていった。そしてロスアンゼルスオリンピック大会で多くのメダルを獲



図3 アンバサダーホテル 晩餐会 昭和7年（1932年）

得したことも併せて天皇陛下に対してお進講で、岸はアメリカにおける日本人への排斥感情などの状況やオリンピック招致の可能性についても、わずかながら実現の可能性⁽²¹⁾があることを話しているが、大学時代のボート関係者が多く宮中の職務に就いていたという事実も、スポーツ界とのつながりを示唆しているように思われる。

7. 天皇家とボート

明治維新後の新政府は海軍の充実を図っていたので、海兵の訓練のためにもカッター訓練はよく行っており、明治16年には隅田川で始めてボートレースに先駆けてカッター競走を行ない明治天皇も行幸⁽²²⁾し賞金を出すなどしていた。

又たびたび隅田川で行われたボートレースに足を運び東京大学や学習院のボートレースなども天覧したが、特に大正天皇は学生のボートレースをモーターボートに同乗して観覧することを好んだが、それらの行事には東京大学でボートを漕いでいた林権助（後大使、宮中御用係）山口鋭之助（島根県松江市出身、後学習院長、後宮中顧問官）などが多くお供を勤めた。さらに秩父宮殿下と高松宮殿下は特にボート競技を愛好しイギリス

製のシングルスカルを購入して浜離宮の池や隅田川の尾久コースなどでボートを漕がれたほどであり、現在でもボートレースには秩父宮杯⁽²³⁾として名前を残していることからボート界との密接なつながりが推察される。

8. 岸のオリンピックに対する考え方

第8代目東京市長永田秀次郎は官選で選ばれたが、第三高等学校時代はボート部の選手として活躍していた。また琵琶湖で行われた第一回全国中学校競漕大会ではすでにボート界では高名であった岸や杉村達などを大会の係員として補佐していたし、第9代東京市長中村是公（元第二代満州鉄道総裁・鉄動院総裁）は東京大学時代は10年間もボート選手として活躍していた。

しかし現在では岸のオリンピック大会招致に対する態度は当時の新聞記事により、岸の発言が東京オリンピック招致に対して消極的であったとして、昭和5年（1930年）再び第14代東京市長になった永田秀次郎が唐突に東京大会招致を言い出したように捕らえている考え方が多く見受けられるが、その時代背景を考えると日露戦争の勝利で軍備の増強を望む声が国内に高まっていった中で

西園寺ら平和主義者の協力を得てロンドン軍縮条約を締結させたライオン宰相こと第27代総理大臣、浜口雄幸は昭和5年（1930年）過激的軍備増強派に東京駅で腹部を銃撃され重症を負い、昭和6年（1931年）1月には怪僧、井上日召の政府転覆計画が露見したがこの計画で標的にあげられていたのは、西園寺や若槻、井上準之助などであった。

また3月事件では軍人の一部と政治家の一部が加担して1万人規模のクーデターを計画し、満州事変が勃発すると4月には若槻が第二次内閣を組閣したが、10月にも陸軍の過激派が再びクーデターを企てたが未然に防がれた。しかし東京市議会は10月に東京市議会において皇紀2600年を記念して第12回オリンピック開催を議決しているが、昭和7年（1932年）大日本体育協会の初代翼賛員でもあった井上準之助（第二次若槻内閣時大蔵大臣、政治家）と三井財閥総裁団琢磨は過激派により暗殺されたが、5月には第29代犬養毅総理大臣を暗殺した5・15事件も勃発した。

岸が第10回ロスアンジェルスオリンピックに出発したのは、これらのような状況下でのことであり、各競技場の建設や大会施設の整備などに膨大な資金と資材を必要とするオリンピック招致などは危険意識が高ければ軽々に発言できなかったのではないと思われる。

しかし昭和8年（1933年）岸が急激な喘息の発作で死亡した後の東京オリンピック招致は、嘉納と杉村を含めた多くの関係者の努力で決定を見たが、戦況の悪化により東京オリンピック大会は規模を縮小しての開催を望む声も強くあったと云われる中で開催を返上辞退することになった。

9. ま と め

昭和39年（1964年）東京オリンピックの開催が近づいた9月30日に岸の銅像の除幕式が島根県庁で行われたが、出席したロスアンジェルスオリンピックから大会に関わっていた主賓のIOC会長アベリー・ブランデー（Avery Brundage）は、時の東京都知事が東京大学でボート選手であっ

た東龍太郎（医学博士、IOC委員、第六代日本体育協会会長）であったにもかかわらず、東京オリンピックは岸の偉業であると挨拶した。

また岸が死亡したのは第7回明神宮競技大会の最中であったため、葬儀はスポーツ界としては大規模なものになり、まるでスポーツ葬の状況を呈したといわれている。会場の青山斎場には花輪200以上が入り口を埋め尽くし、明治神宮大会に参加していた各競技団体の代表等が会旗を先頭に参列し皇室関係、政財界を含めた参列者は2千人以上にもなった。

やがて国際連盟事務局長を務めIOC委員となった杉村陽太郎が、健康を害しIOC委員を辞退した後に惜しまれつつ早世すると、嘉納も東京オリンピック大会開催決定をもって帰国途中の氷川丸船上で肺炎のため急逝した。

さらに岸が駐米大使就任を要請⁽²⁴⁾されていることを生前漏らしていたことから、もしこの時代に語学に堪能でスポーツを通して培った豊富な人脈を持つ駐米大使が誕生していたら、その後の時代に与える影響は少なからず大きなものがあつたであろうと思われる。

これらのことから、昭和15年（1945年）の東京オリンピック大会が実現していれば、その後の日本が戦争の道に突き進んでいく事態はオリンピック大会の基本的理念でスポーツを通じて心身を鍛練し、国や地域、文化の違いを超えてお互いを理解し世界平和に貢献するとしたオリンピズム（The Olympism）の精神を日本の国民の多くが理解することによって、少ない可能性ながら回避することができたのではないと思われる。

今回の東京オリンピック招致活動が成功できなかった事で、東京都はオリンピック招致戦略室を立ち上げ継続的に2020年夏季オリンピック招致活動を継続していく事を表明したが、昭和15年当時に岸と若槻をはじめとした多くの関係者が協力してオリンピック大会の招致活動にあたったことに我々の学ぶべき点も多いと思われるが、昭和15年東京オリンピック招致活動が成功に終わった要因の詳細については、さらに今後の研究を待たなければならない。

《注》

- (1) アスレティズム思想：19世紀のイギリスでジェントルマンとしての立ち居振る舞いを習得するために、パブリックスクールやオックスフォード・ケンブリッジ大学等で行われた集团的スポーツであるクリケット・フットボール・ローイングなどの実践を通して理想の人格形成を計ろうとした思想。
- (2) 伊藤之雄『元老西園寺公望』文芸春秋、2007年、p. 41
- (3) 若槻禮次郎自伝『古風庵回顧録』読売新聞社、1950年、p. 71.
- (4) 若槻禮次郎自伝『古風庵回顧録』1950年、p. 4.
- (5) 東京大学淡青会『東京大学漕艇部百年史・上巻』1987年、p. 90.
- (6) 岸同門会『岸清一伝』1939年、p. 187.
- (7) 大日本体育協会『大日本体育協会史・上巻』1936年、p. 16.
- (8) 嘉納治五郎『私の生涯と柔道』日本図書センター、1997年、p. 70.
- (9) 嘉納治五郎『私の生涯と柔道』、1997年、p. 23.
- (10) 嘉納治五郎『私の生涯と柔道』、1997年、p. 237.
- (11) 尼子止『平民宰相若槻禮次郎』モナス、1926年、p. 178.
- (12) 嘉納治五郎『私の生涯と柔道』、1997年、pp. 112, 119.
- (13) 大日本体育協会『大日本体育協会史・上巻』1936年、p. 16.
- (14) 大日本体育協会『大日本体育協会史・上巻』1936年、p. 18.
- (15) 日本体育協会『日本体育協会 50 年史』日本体育協会、1963年、p. 27.
- (16) アマチュア資格問題、第7回オリンピック大会

国内予選会競技申込心得に規定された、脚力を用いることを生業にしないというもので、当時は好成績を収めていた車夫が競技会で着順を除外されたため確執が生じた。日本体育協会『日本体育協会 50 年史』日本体育協会、1963年、p. 33.

- (17) 大日本体育協会『大日本体育協会史・上巻』1936年、p. 27.
- (18) 岸同門会『岸清一伝』1939年、p. 198.
- (19) 岸同門会『岸清一伝』1939年、p. 198.
- (20) 岸同門会『岸清一伝』1939年、p. 239.
- (21) 大日本体育協会『大日本体育協会史・上巻』1936年、p. 624.
- (22) 宮田勝善『改定、ボート百年』時事通信社、1976年、p. 114.
- (23) 宮田勝善『改定、ボート百年』1976年、p. 142.
- (24) 宮田勝善『改定、ボート百年』1976年、p. 306.

引用文献

- 尼子止 (1926) 「平民宰相若槻禮次郎」モナス
 大日本体育協会 (1937) 「大日本体育協会史」、大日本体育協会
 伊藤之雄 (2007) 「元老西園寺公望」、文芸春秋
 岸同門会 (1939) 「岸清一伝」、岸同門会
 宮田勝善 (1976) 「改定、ボート百年」、時事通信社
 日本体育協会 (1963) 「日本体育協会 50 年史」、日本体育協会
 高野義夫 (1997) 「嘉納治五郎・私の生涯と柔道」、日本図書センター
 東京大学淡青会 (1987) 「東京大学漕艇部百年史」、東京大学淡青会
 東京文理科大学 (1931) 「創立 60 年」、東京文理科大学
 若槻禮次郎 (1950) 「若槻禮次郎自伝・古風庵回顧録」、読売新聞社